

イタリア紀行——初めての国際会議

電通大・韓太舜 2004年5月1日

★はじめに★

最近、ある資料を探すために書類を整理していたら、今から丁度25年前に、初めて国際会議に参加（イタリアで開催）したときの様子を「イタリア紀行」として「相工大新聞」に書いた記事が出て来た。話は筆者が湘南工科大（当時・相模工業大学）に助教授として奉職していた1979年のことである。

懐かしくて読み返してみると、国際会議というものに初めて参加した一研究者としての「初々しさ」とヨーロッパ文化に初めて直接触れた一旅人として受けた「鮮烈な印象」が蘇って来た。今頃の若い人達には想像すら出来ないかも知れないが、当時は1ドル360円の時代であり、海外出張といえば極めて特別なことで、各種の職場単位で歓送会をいくつもやったり、出張前の研究会で練習のために英語でしゃべって見たり、あるいは、ヘタをすると、成田空港の出国ロビーの所に親類縁者が集まって「バンザイ」、「バンザイ」などとやり兼ねない程だったのである。ちなみに、当時は、海外発表のための「財団基金」など、私の知る限りでは皆無で、海外発表といえば、特別の大物以外は、自腹を意味していた。

ところで、この紀行文を読み返してみると、ここに書かれている研究者としての「研究者魂」と現在の研究者としての私の「研究者魂」は、25年間という長い歳月に隔てられながらも、本質的には何ら変わっていないことが分かる。これは何を意味するのであろうか。この長い歳月、「研究者としてのマインド」は全く進歩がなかった、ということなのか、それとも、「研究者としてのマインド」は若いときにその骨格がほぼ出来上がってしまうということなのであろうか。

今年は、折しもISITA2004が「当たり前の国際会議の一つ」としてイタリアのパルマで開催されることになっており、これに参加すれば、丁度四半世紀の間の研究人生が一つのループを描いて再びイタリアに回帰するということになる。因縁話ではないけれども、いつの間にか、もうそんなになったのかという深い感懷を禁じざるを得ない。若い研究者達が、この紀行文を読んで、そんな時代もあったのかと、自分の「研究者魂」を再認識するキッカケにして戴ければ、喜びこれに勝るものはない。25年間という長い歳月の間には、ドイツ統一、ソ連崩壊、中国の開放・改革、EU誕生、米国一極化、などの歴史的イベントがヨーロッパのみならず世界的規模で起こっており、国際会議や国際ワークショップなどのあり方にも多大の影響を与えた。そのために、その当時の進行形で書かれている以下の紀行文は、今の時代の文脈にそぐわない部分は何ヶ所か含まれているが、それらは敢えて修正しないことにした。修正によって「その時代の空気」が損なわれることを恐れたからである。

★イタリア紀行1★

1979年6月19日から7月19日までの1ヶ月間、初めてヨーロッパに出張する機会を得て、情報理論関係の研究者と会い、議論、論文発表、講演などの研究活動を行うことができた。私にとっては、海外出張は初めての経験であり、出

発前の準備から始まって、すべてが試行錯誤の連続であったが、きわめて有益な体験であった。

今回の出張で予定した目的は、ハンガリーの科学アカデミー数学研究所での講演（6月21日－24日）、イタリアで開かれる IEEE-ISIT（電子電気工学者協会・本部は米国）国際情報理論シンポジウム（6月25日－29日）での論文発表（2件）、情報理論の若手研究者のためのサマー・セミナー参加（7月2日－12日）の3つである。もともと無精者の私にとっては、国内で開かれる学会ならいざ知らず、海外にまで出かけて行くなどというのは、およそ考えられないことであったが、それが実際に外かけて行くハメになったのは、同じ分野の研究者として何回も IEEE の国際情報理論シンポジウムに参加されている大阪大学の有本卓先生のお薦めに、ついその気になってしまったのが一つの理由である。もう一つの理由としては、私が専門とするシャノン理論（情報理論の一分野）の研究に関して、現在かなり激しい競争が展開されているため、後発の私としては、結果を出来るだけ早く発表し、プライオリティを主張する必要があると判断したためであった。

6月19日に、同行者の小林欣吾氏¹、橋本猛氏²と共に成田空港を出発してモスクワ経由でハンガリーの首都ブダペストに到着したのが翌6月20日で、科学アカデミーのチサル（Csiszár）教授が地理不案内の私達のために空港に迎えに出て下さった。車で約30分、ブダペストの都心に入ると、薄ぼけた装いの5階建の建物がどっしりとした感じで長い伝統と歴史を背負って立ち並んでいた。建物の壁面はところどころ剥げ落ちそうになっていて、銀座のきらびやかさを見慣れた者にとっては、これが都心かと思わせるのに十分であった。あとで聞いたことであるが、これらの建築物は大体二百年前から三百年前に建てられたものであるという。

科学アカデミー数学研究所も、目抜き通りに面していながら同様の外観を呈していた。しかし、通された部屋は、それまでの煤けた印象とは裏腹に、長い伝統によって磨き上げられたツヤを放ち荘重であった。それは、ある種の威厳さえ伴っていた。やや気圧されながら部屋を眺めてみると、つい最近亡くなられた確率論の世界的権威であるレニ（Rényi）教授の写真が、部屋に入る者を見下ろすように掛けてあった。情報理論の世界的大家であるチサル教授はレニ教授の直弟子であるという。

ここで、コルネル（Körner）、モルトン（Marton）の両教授にお会いしたが、コルネル教授は最も才能のある若手研究者の一人として良く知られている（彼は、チサル教授の弟子）。また、モルトン教授は東洋系の面立ちをした、淑やかで控えめといった感じの黒髪の女性で、その雰囲気はむしろ「大和撫子」のそれに近かった。このことは、小生に、その昔フン族がヨーロッパへ大移動を行い、主要部がもとに戻った際にも、そのまま居着いたのが基礎になったといわれるハンガリーの歴史を思い出させた。長い間に周辺民族との混合が繰り返されたようで、ハンガリー人の顔形はじつに様々である。コルネル教授の話によれば、ハンガリー語の基礎は、スラブ系でもゲルマン系でもラテン系でもなく、種々の系統の言語の混合体とでも言うべきものであるが、どちらかと言えば、「トルコ系」が基本となっているらしい。なお、ハンガリーの正式名は「マジャール」であり、また姓

¹ 現・電気通信大学教授、当時・大阪大学助手

² 現・電気通信大学教授、当時・大阪大学大学院生

名や住所の表記も日本と同じ順序である。

しばらくの間、雑談をしたり研究所を見て回ったあと、食事に招待されて近くのハンガリー風レストランに出かけることになった。ところが、ハンガリー語で書かれたメニューには全く歯が立たず、コルネル教授が「いかなる種類の食べ物を、いかなる順序で食せんと欲するか」という調子の質問を私に浴びせる役を買って出た。ディナーという雰囲気にはそぐいそうにも無い、いかにも論理的な質問に私がなんとか答えると、メニューの中からそれに一番近いと思われるものが選び出されて、やっと食事にありつけるという仕儀と相成った。しかし、ハンガリー自慢の白ワインは文句なしに美味であった。このワインの味と心のこもった歓迎は、旅の疲れを忘れさせてくれた。そして、ああここは本当に、日本から遠く離れたハンガリーの首都ブダペストなのだという心地よい感懐が胸いっぱいになり心を満たした。

★イタリア紀行2★

翌日（6月21日）は、「通信路ネットワークに対する符号化問題のポリマトロイド的側面について」という題で約1時間の講演を行ったが、講演会場も前回通された部屋と類似の重々しい雰囲気にあった。高い天井がその趣を倍加させていた。

さて、次の日からは、チサール教授とコルネル教授が交代で、食料、地図、衣類、雑貨、傘（この日は丁度雨だった）の買い物や両替、そして、列車の切符の手配などにいちいち付き合ってくれたばかりか、食事の度にレストランに同行してくれることになった。いま問題の過保護児にでもなった気分で、内心、苦笑を禁じ得なかったが、異境にあって受ける親切ほど身にしみるものはないとは、よく言ったもので、私は大いに感激し大いに感謝した。実際、このような好意がなければ、私はブダペストの真ただ中で完全に立ち往生してしまったに相違ない。ハンガリーでの買い物や旅行関係の手続きは、日本とシステムが異なるため、地理不案内の者にとっては想像以上の困難を伴う。ちなみに、ハンガリー最大の鉄道駅であるブダペスト・ケレチでも英語は一切通用しない。通じるのは、ドイツ語かロシア語で、それも年配の人達に限る。ハンガリーが経てきた歴史の故である。

チサール、コルネルの両教授は、数年前から多端子情報理論に関する最新の研究成果をまとめて、ハンガリー科学アカデミー出版所（アカデミック・プレスとの共同）から本として出版するため準備をして来られたが、私がブダペストを訪問した時期は、丁度、最終原稿が出来上がっていて、それを出版社に引き渡す所であった。その原稿を私に見せてくれたので、いつ本になるかを聞くと、「ノー・ボディ・ノウズ」といって大仰に手を広げておどけて見せたのが面白かった。前日、研究所の建物が一部改修中なのを見て「いつ完成するのか」と尋ねたときにも、同じ答えが返って来ていた。

精神文化と物質文化という言葉が対になって使われることがよくある。文化の実際の有り様がこの二つのうちのどちらかに要約されてしまうほど単純でないにしても、何かを考えさせてくれるキー・ワードにはなり得るであろう。あえてこの二分法に従うと、ハンガリーの文化は、果たして前者であろうか、後者であろうか。後日、イタリアからの帰途、成田へ向かう飛行機で、たまたま一緒にいた茨木大学の先生と癌研究所の先生は、いずれもハンガリーとは縁の深い方々であったが、ハンガリー文化の印象を「奥行きの深さ」と「ノーベル賞受賞者が7

人」という言葉で、それぞれに表現されていた。

さて、イタリア行きの日が迫って来たので、チサール教授にお世話いただいたお礼を述べ、日本での再会を約して別れた。日本とハンガリーの間には、学術交流のための国レベルの確立された組織があり、また東海大学のように大学単位で太いパイプを有している例もあるので、この再会の約束は、その内に実現されるのではないかと楽しみにしている。

ブダペストでの滞在は、一週間たらずという限られたものではあったけれども、受けた印象は強烈であった。旅先で受けた親切の味もさることながら、街中を貫いて流れるダニューブ川やそれに架けられたエリザベート橋の美観、古の王宮であったブダ城の威風、都心から歩いて30分ほどの距離にある大公園の水と緑、そして何よりも、歴史と見事に調和した都市のパノラマは、私の心を激しく燃え立たせた。目まいがするほどの鮮烈な感動であった。

★イタリア紀行3★

いよいよ、イタリア行きの日が来た。6月25日、ブダペスト・ケレチ駅でウィーン行きの国際列車に乗り込んだのが午後3時であった。ケレチ駅からは、オーストリア、フランス、ドイツ、ユーゴスラビア、ポーランド、トルコ、ルーマニアなどの各国と結ぶ国際列車が頻繁に発着しているの、目的の列車とコンパートメントを間違いなく探し当てるのが一苦勞であった。誰かに尋ねようにも英語が皆目通じなかったからである。身振り手振りで、おおよその情報は得られたが、それだけでは、このような大事な場面でのコミュニケーションとしては、「ノイズ」が大き過ぎて信頼度が低いと思われた。そこで、同一の質問（らしきもの）を異なる何人かの人に試みてその答えが一致した場合をもって正解とみなす、という方法を実行して、結局は、所期の目的を達成することが出来た。

筆者の席があるコンパートメントには、化粧品の商売のためパリに向かう途中のトルコ人が一人、ハンガリーに住む両親に会いに来てパリに帰る元ハンガリー人のフランス人が一人、スウェーデンに住む友人を頼って行く亡命途中のルーマニア人が一人、そして私の四人が乗り合わせた。

四人はそれまで一面識もない間柄であったにもかかわらず、簡単な自己紹介をした後すぐに打ち解けてしまうという不思議な雰囲気であった。駅で買い込んだビールで乾杯を繰り返しながら、ブローケン・イングリッシュのフランス方言、トルコ方言、ルーマニア方言、日本方言による奇妙で愉快的談論風発の宴が催されることになった。

元ハンガリー人のフランス人は、パリにある「京都」という日本料理店の愛好家で、スキヤキ、テンプラ、サケなどなどについて、驚くほどの詳しい知識を持っていた上に、ハシの使い方やサケの飲み方についても「信念」を持って自説を展開してきた。酒宴も佳境に入る頃になると、彼は旧約聖書の話を持ち出して、「我々のこのコンパートメントは〔ポート・オブ・ノア〕で選ばれた神の代表を乗せているのである。であるから乾杯！洪水が来たから乾杯！洪水が引いたから乾杯！」といった調子で怪気炎を上げ始めた。我々もすぐさまそれに合流し、皆で「乾杯！」、「乾杯！」と叫びながら、空になったびんを車窓から景気よくバンバン放り投げた。よく見ると、ガラス窓には、赤でバツテンしたびんの絵が書かれていた。要するに、この国の人々は、酒やジュースを飲んで、やたらに空

びんを車窓から投げ捨てるのが、得意技であるらしいのである。また、件のトルコ人は、商売熱心で、近い将来ハンガリーにも化粧品の商売をしに行くつもりらしく、元ハンガリー人のフランス人からしきりに予備知識を仕入れていたのが面白かった。アンソニー・パーキンスばりのハンサムなルーマニア人は、おもむろに立ち上がったかと思うと、お国自慢のブランデーを厳かな身振りで取り出して皆に飲ませ、盛んに感想を求めた。話に興ずる間に、列車はハンガリーとオーストリアの国境沿いにあるハッジヤシュロームという町に差しかかり、パスポートの検査官が乗り込んで来た。列車はここで1時間半ほど停車した。

筆者は「国境」というものを初めて見る好奇心に駆られて、国と国とを隔てる「歴然たる何か」を必死に見つけようとしたけれども、ついにそれらしきものを見いだすことが出来なかった。むしろ、鉄道と平行に走る道路では、検閲を待つ自動車が両方向に二百メートルほど数珠つなぎの列をなして並んでいたこと、家並みや田園のたたづまいや色彩が微妙に、あるいはハッキリと変化していたことなどが印象的で、それが国境の実態であったと言えるかも知れない。

個々の人々を「超えて立つ不可侵の何か」が国境であるというイメージからすれば、この様子は驚きであり衝撃でさえあった。たまたま乗り合わせたコンパートメントが、すでにミニチュアの国際社会であつたり、国境がむしろ通行往来の交差点のような実態にあることなどをどのように理解すればよいのであろうか。国境は、国と国とを隔てる壁ではなく、国と国とを結ぶパイプのようなものであろうか。あるいは、国境が人々の日常生活の中に取り込まれているということにでもなるのであろうか。

国境を越えた人的往来が、日常生活の延長として極めて盛んに行われているのは事実らしく、そう言えば、筆者がブダペストに滞在していた時期、イタリア大使館に、バカンスの季節ということもあって、ビザを申請するハンガリー人が毎日早朝から百人ほど行列をなして待っている光景が見られた。

もちろん、国と国との間に、一旦政治的緊張が高まれば、日常生活の中に取り込まれていた国境が、逆に、日常生活を飲み込んでしまうことになり兼ねないであろうが、その場合にも、日常的に培われた結びつきを一挙に断ち切ることはほとんど不可能に近いであろう。

日本でも最近、国際感覚ということについて論じられる機会が多くなって来たけれども、この種の問題は、若い学生諸君にとっては魅力的な課題であろうと思う。

ハッジヤシュロームを過ぎてウィーンの西駅に到着したのは、午後8時を少し回った頃であつた。ウィーンの地理に明るい件のフランス人の親切に助けられ、南駅からイタリアに向かう夜行列車にギリギリのタイミングで無事に乗り換えることができた。あとは、ただ眠るだけである。翌朝目が覚める頃には、最終の目的地イタリアのトリエステに入っている筈である。心が躍った。

★イタリア紀行4★

1979年のIEEE国際情報理論シンポジウムは、イタリアのトリエステ近郊にあるグリニャーノで6月25日から29日までの5日間に亘って開催された。IEEEと言えば、電子工学や電気工学の分野および情報工学などの関連諸分野にわたる研究者にとっては、余りにもよく知られているので、説明の要はないであろう。

しかし、専門の異なる方々のために申し添えれば、これは Institute of Electrical and Electronics Engineers の略称で、米国のニュージャージーに本部を置き、世界各地に支部を持つ国際的な研究組織のことである。日頃から、「アイ・トリプル・イー」という愛称で親しまれている。

IEEE 情報理論部門の国際シンポジウムは、一年半毎に、米国および米国以外の国で交互に開かれることになっているが、今回は米国以外の国の番に当たり、イタリアのグリニャーノが開催地として選ばれたという次第である。シンポジウム会場のあるグリニャーノは、地中海が細長く南北に切れ込んで出来たアドリア海の最北端に位置し、ユーゴスラビアとの国境近くにある風光明媚な保養地として名が知られている。そこから眺めるアドリア海は鏡のように波静かで、コバルト色の空と競い合うがごとくの海の紺碧が魅惑的であった。

グリニャーノ到着後直ちに組織委員長のロンゴ (Longo) 教授 (トリエステ大学) に挨拶に伺ったが、彼は洗練されたヨーロッパ紳士の典型で、世界各地から到着する研究者の世話で多忙を極めていた。筆者が会議参加に際して受けた諸々の便宜に対する礼を述べると、ロンゴ教授は「それは私の仕事である」と言いながらニヤリと笑って見せた。

シンポジウム参加者は、すでに名の通った大家から新進の若手研究者に至までの各層を網羅するの感があったが、若手組はおしなべて自己主張と新事実吸収の意欲に燃えて、あちこちから集まって来たという風であったのに対し、大家連はまるで自分の家で寛いでいるかのような余裕を漂わせつつ、しかも、あくまで研究者として現役であることの迫力と威厳を感じさせた。

さて、筆者の提出した論文の発表は、26 日と 28 日に割り当てられて、いずれも多端子シャノン理論の分科会で行われることになった。このうち、26 日の発表は「一般的多端子情報源に対する許容伝送率領域」(小林欣吾・大阪大学助手との共著) についてであった。これは、1948 年の天才シャノンによる論文「通信の数学的理論」以降のシャノン理論における最も重要なマイル・ストーンの一つと言われる論文「相関のある情報源の分散符号化」(ベル研のシュレピアン (Slepian) 博士と当時・マサチューセッツ大学のウォルフ (Wolf) 教授との共著)、および、それに端を発した一連の研究成果を「統一的な枠組み」の中に捉え直すことによって、これらの問題を理論的に完結させることを目指したものである。

このような問題意識は前出のチサール、コルネル両教授 (ハンガリー科学アカデミー) も持っていて、彼らの論文も同じ分科会で発表された。筆者のとはアプローチが全く異なっていたけれども、解決された問題はほぼ重なり合うものであった。分科会では、両論文の比較に関して多くの討論が行われたが、とくに、多重アクセス通信路理論の創始者の一人であり、またコルネル教授との共著論文も発表している西ドイツのアールスウェーデ (Ahlsweide) 教授 (ビーレフェルト大学) は、筆者の発表の内の「許容伝送率領域」の外界に関する部分に興味を持ったらしく、まるで速射砲のようにエネルギーを浴びせて来て激しいやりとりとなった。このやりとりの延長戦は分科会が終わったあとも一対一で続けられたが、慣れない英語で疲れがひどくなって来たので、今後も意見を交換することにして討論を途中で打ち切った。アールスウェーデ教授は一見すると、嘯み付きそうな感じのヒゲ面で、今年 (1979 年) 12 月上旬に開かれるヨーロッパ地域の情報理論の大会組織委員長でもある。

28日の発表題目は「通信路網に対するシュレピアン・ウォルフ・コーヴァの定理」というもの。任意個の独立な通信路を結合した一般のネットワークと多数の相関を有する情報源を一組にして考えたときの通信路と情報源のマッチング問題を扱っている。この論文は、通信路と情報源がそれぞれ組み合わせ理論の概念であるポリマトロイドと補ポリマトロイドをなすことを利用してマッチングのための必要十分条件を与えたもので、シュレピアン博士、ウォルフ教授、コーヴァ(Cover)教授が出した結果の拡張になっている。

この発表では、アイディアの説明に以外と時間が掛かって与えられた持ち時間を超過したので、予定の質疑は省略されることになってしまった。しかし、休憩時間になると、興味を持った研究者が何人か集まって来た。その中に、放送型通信路理論の創始者であるスタンフォード大学のコーヴァ教授がいた。同大学の情報システム研究所は、世界の情報理論研究のメッカと言われていたが、その指導的立場にいたのがコーヴァ教授であった。彼は、私の名前を呼びながら近寄ってきて、握手を求めて来た。私が情報理論研究を開始した初期に、たまたま彼の書いた論文を読み、その議論の簡潔さとエレガントな美しさに深く感動して以来、彼の書いた論文を片っ端から読んで、またまた、新たな感動を体験をするということをし繰り返していたので、そのコーヴァ教授と実際に会って握手することになるろうとは、光栄の極みであった。彼は「お前の定理はこういう問題にも使えるのではないか」と言ったかと思うと、やにわに紙と鉛筆を取り出して式を書き始めたが、こちらは、上の空で、何の事なのかさっぱり分からなかった。

コーヴァ教授は独創的な論文を書くことでも有名であり、筆者も日頃から尊敬している研究者の一人であるが、髭をたくわえサングラスをかけた長身(約2メートル)が醸し出す異様な雰囲気は、ウワサに聞いていた「教祖」の名にまことに相応しいものであった。そして、大仰な手振りで舞いを舞うように発表する彼の姿に初めて接して、その迫力に仰天してしまった。それは、まさしく、鶴が地上に降り立ち悠然と舞う優雅な舞いそのものであった。

★イタリア紀行5★

いままで、1979年のIEEE国際情報理論シンポジウム(イタリアのグリニャーノで6月25日から29日までの約一週間にわたって開催)の様について、筆者の論文発表に関する話題を中心に紹介した。

そこで、今回は、まとめとして、情報理論研究の今日の潮流や今後の方向を判断するための材料として、シンポジウムで発表された論文のテーマについて簡単に要約しておきたい。参加者数は約270名ほど(最近のISITの参加者数が750名前後であることを考えると今昔の感あり、極めてアットホームな雰囲気に満ちていた)、発表論文の総数は252件で、その内、招待講演は4件であった(この中の一件は、日本から参加した大阪大学の有本卓教授による「畳み込み符号の計算の複雑さ」というもの)。発表論文の主なものを列挙すると次の通りである(カッコ内は発表件数)。分散スペクトル方式による多重通信システム(6件)、情報と不確定性の測度(4件)、信号のフィルタリングと推定(13件)、パターン認識(14件)、シャノン理論(20件)、多ユーザ・シャノン理論(15件)、確率過程(25件)、符号理論と設計問題(24件)、画像処理(9件)、計算の複雑さ(6件)、ユニバーサルなデータ圧縮(8件)、ブロック符号理論(8件)、周波数 デジタル

変調 (5 件), コンピュータ通信網 (14 件), 光通信 (4 件), 畳み込み符号理論 (7 件), 信号検出理論 (14 件), 確率システム (6 件), 暗号理論 (6 件), 通信システムの性能解析 (14 件), 適応検出とロバスト検出 (8 件), 情報源の符号化 (9 件), データ通信 (8 件), レーダ・システム (5 件)。

以上に挙げたテーマの分類は, ほぼ分科会の区分に対応しているが, 私の判断で, 二つ以上の分科会で取り扱われたものを一つにまとめたものもある。私が専門とするシャノン理論および多ユーザ・シャノン理論については, 合計 35 件の論文が発表されたが, この分野は現在, 米国, ソ連, ハンガリー, 西ドイツにおいて最も活発に研究されており, とくに, ハンガリーの研究者による成果は, 手法の斬新さと独自性によって高く評価されている。

IEEE 国際情報理論シンポジウムの終了後, 私は, 続いて開かれた多重通信系に関するサマー・セミナー (7 月 2 日から 13 日まで) に参加した。場所は, シンポジウムの開催地グリニャーノの北方で, アルプスから東南に約 50 キロの位置にある イタリアの古都ウディネであった。このサマー・セミナーは, CISM (Centre International des Sciences Mechaniques) の主催によるものであるが, 情報理論の若手研究者のために, 前出のロンゴ教授が組織したものであった。

参加者は, 30 才代を中心として, フランス, ベルギー, ハンガリー, ドイツ, イタリア, エジプト, シリア, 中国, 日本などの世界各地から集まって来た人達であった。講師陣は, バーガー (Berger) 教授 (コーネル大: IEEE 情報理論部門の委員長), ウォルフ教授 (前出, マサチューセッツ大学), マッセイ (Massey) 教授 (ノートルダム大), パーズリー (Pursley) 教授 (イリノイ大: IEEE 情報理論シンポジウム・プログラム委員長) などの大家連で, 朝 9 時から夕方 6 時頃までぎっしり詰まった講義を, これらの講師が交代でこなしていたが, 確立された名声にたがわぬ充実した講義は流石と思わせた。

セミナーは, それまでのシンポジウムにおける論争の緊迫感とは打って変わって, 「同じカマの飯を食う」といった打ち解けた雰囲気満ちていた。どことなく愛嬌のある顔をした電気技術者のエジプト人はセミナーの常連で, 毎年参加しているとのことであったが, ナイル川やアレキサンドリアなどのお国自慢に余念がなかった。

また, 中国から初めて参加した三人の教授 (北京大や南開大など) は, 私が風邪を引いた時には親身になって心配して「特製」の中国製風邪薬をくれたりした。彼ら三人は, 研究者個人として参加したというより, むしろ国の代表として派遣されて来たという風で, 情報理論研究の今日の成果とレベルについて精力的に資料を集めていたが, 「四人組のために中国の科学研究は十年間の空白を余儀なくされたけれども, 若い人達はハードに勉強しているので, 近いうちに, 世界のトップ・レベルに追いつくことが出来る」と語っていたが, 彼らは確かに, そのような信念と情熱に溢れていた。

さて, 今まで 5 回に亘って, イタリア紀行という題で, 約 1 ケ月間にわたるヨーロッパ訪問の際の印象や出来事を思いつくままに書き連ねて来た。私にとっては初めての海外出張であり, どの出来事も忘れ難い思いが込められていて, ブダペスト・イタリア領事館の女ボスのこと, CISM セミナー室の荘厳な天井画のこと, イタリアの地方紙にセミナーの様子が紹介されたこと, バーガー教授のハーモニカ演奏のこと, フランス人研究者のブライドのこと, 楽しい親睦パーティの

こと、歌とカンツォーネのこと、特大のピザのこと、ウディネの素敵な広場のこと、美人のスリと赤ちゃんのこと、街のお姫さまのこと、アドリア海に浸した足のこと、レストランのウェイターの獅子奮迅の働きのこと、そして、それより何よりも、ピザの件での数々の苦労など、まだまだ書き足りないことは多いけれども、研究活動を中心にした紀行文の趣旨は大筋において達したものであると思うので、この辺で筆を置くことにしたい。